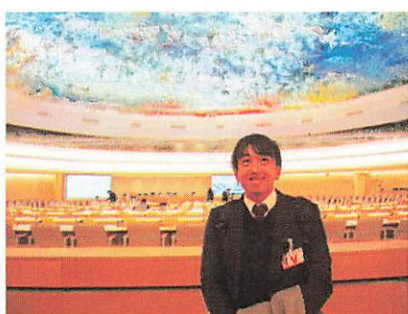


国連機関で学ぶ人権と国際保健 ジュネーブ（スイス） 2/19～2/24

飯山智史（2年）

渡航先での活動内容

世界保健機関（WHO）で働いておられる金城文さん（鳥取大医学部から出向されており、substance abuse=薬物乱用に関わるチームで、若者のメンタルヘルスに関わる仕事をしてらっしゃる。）や錦織信幸さん（臨床医師、国境なき医師団、UNICEFなどでの活動後、現在はWHOで結核対策に関わっておられる。）や国際連合人権高等弁務官事務所（OHCHR）で働いておられる長谷川清彦さん（国連事務局ヤング・プロフェッショナル・プログラム=YPPに合格し、NY本部のPKO局で数年働いた後、OHCHRに移動し、現在は中東や北アフリカの人権問題を中心に扱っている。）にお会いし、お話を聞かせていただいた。その他の時間は、欧州国連本部やWHO本部の建物に入れさせていただき、内部の見学も行った。「国連」という一見自分たちと現場から遠そうに感じる場所で、職員さんたちはどのように人権問題や国際保健に関わっているのか、ということは何よりも近くで、学びに行かせていただいた。



目的を達成できたか

国連機関で働いておられる方の話を聞いたことは自分が目的としていた、「国際機関で働くということの実態を知る」ということに何よりも近づくことのできる経験になった。実際に、どんなことを仕事として行っているかということだけではなく、キャリアステップ、国連職員になろうと思ったきっかけ、ワークライフバランス、ジュネーブでの生活について、人生そのものについての話など、そこでしか聞けないような話を多く聞け、学ぶことができてとても良かった。長谷川さんは奥様にも会わせてくださり、国連職員の家族での生活というものも知ることができた。また、ツアーでは回れないような国連内の場所をいくつも紹介して下さったり、食堂でご飯を食べたりできたのも、とても楽しく、素晴らしい経験になった。

将来の進路決定へどう影響したか

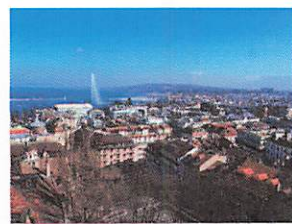
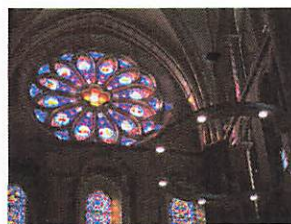
自分が興味があり目指していた「国際公務員」という職業に実際についておられる方々の話を聞いたことで、私が思い描いていたものとのギャップ、国際公務員としてできないこと、今の自分に必要なものなど様々なことが見えた。何よりも大事なのが「何になりたいか」ということではなく「何をしたいか」ということ、そしてそのために自分に今何が足りなくて何をしなければいけないのかということをやさしく考えていかなければならないと学んだ。自分のこれからの将来に向けての選択の中で、非常に重要なキーワードになった。

研修支援制度に望むこと

自分が興味がある分野で、訪れたい国・地域があっても、なかなか自分一人では、お金の関係や「思い切り」がないために学びにいけないという状態の人は多いと思う。その人たちの背中を押してくれる貴重な制度であると思うので、最初は漠然とした興味範囲かもしれないが、自分一人でも計画を立てられるように、お金だけでなく、メールの打ち方や人の紹介などの面でもサポートしていただけるのがありがたい。

グローバルな視点とは何か

様々な国や民族の文化を「外のもの」として考えるのではなく、自分の中に取り入れることで手に入れられるものだと思う。文化は、本や理屈で知ることでも大事であるが、何よりも肌で感じ、暮らしを見ることで初めて、心から理解することができると思う。私は今回初めてのヨーロッパを訪れたので、宗教や食、人との関わり方など、文化の面で学ぶことも多くあった。そういう点では私も今回の国際研修で、少し「グローバル」な視点に近づけたかもしれない。



目的以外に学んだ点、反省点

研修の計画を自分で立て、アポイントメントも自分で取るという経験は初めてだったため、とても勉強になった。本来は、スイスで行われている「自殺援助」のことも学ぼうと計画の中に入れていたが、アポイントメントがうまく取れず、訪ねることができなかった。一つのルートがダメでも、いろいろなルートからアプローチすること、そしてそれを早めからどんどん行っていくことが大事であると学んだ。

後輩へのアドバイス

アポイントメントが取れるだろうか、、と不安でも、自分の身近にいる方に相談して繋げてもらえれば、素敵なお方に出会えます。自分の関心ごとに正直に、行動力を持って動けば充実した研修にすることができると思います。お世話になった方々への感謝は忘れずに。